

## 秋田県大館市・由利本荘市・横手市の病院経営について

平成29年8月7日・8日・9日  
土岐市議会 会派 市民ファースト  
後 藤 久 男

### \*大館市立総合病院

面積は、913.22ヘーホーキロメートルで人口約7万4千人である。忠犬ハチ公の生誕地であり、この秋田犬が有名である。また、比内地鶏の産地でもある。

明治12年5月私立大館病院を設立し、明治15年12月に近隣町村の連合による公立大館病院を設立し、昭和41年2月に公立大館総合病院を解散し、大館市立総合病院の開設となった。

平成20年に病院の健全経営のため公営企業法全部適用に移行し、平成21年11月に弘前大学専門医療養成病院ネットワークに関する協定締結をする。この全部適用を導入時には、市長自ら病院経営について並々ならぬ努力をされ、病院管理者を青森県弘前大学医学部教授を招聘し、全部適用の運びとなった。大館市は、青森県との県境に位置するため、秋田市より青森との繋がりが強く、弘前大学医学部とも協定を結んでいたため、また、秋田大学医学部より弘前大学医学部が各上であり、秋田大学医学部からの異論は無くスムーズに実現可能となった。

全部適用実施に、病院スタッフも「自分たちで病院経営をする」という意識があり、経営改善に繋がった、また、医師の派遣についても担保もあり、病院収益の向上に繋がった。

全部適用により、民間手法を多く取り入れることにより、医師・看護師を始めとする職員は、公務員的な考えから脱却し健全経営に努められた。

これまでは一部適用で経営をしていたが、管理者である市長は経営の限界を痛感し、経営形態の見直しを早急に着手し、全部適用を実現され、市民の医療・健康増進の安全・安心に大きく寄与された。

土岐市の現状をみても分かるように、市長の管理者では限界があり早急に全部適用に取り組む必要があると考える。

病院屋上には、ヘリポートを有し、緊急時にはヘリで弘前大学医学部に搬送をする、また、建物は免震構造であり、電気設備等をはじめ施設管理は民間委託をしている。

\*由利本荘市 本荘第一病院及び門前薬局について

本荘第一病院は、もともと農協の強い地域で厚生連に勤務医として就労していた小松寛治先生が厚生連病院の経営理念に疑問を抱き、昭和63年7月2日に創設した私立病院である。

小松先生は、日本で最初の内視鏡処置の先駆者であり、大学ではない地方病院で内視鏡処置を世界に先駆けて実施された。

当初から「地域と手をつなぐ医療」という理念を掲げ、これを実現するために地域住民の中から評議員及び給食検討委員会を立ち上げ、委員会の意見聴衆を取り入れながら、病院の健全経営を展開されている。

現在は、無医師地区への早朝人間ドックを病院側から実施され、利用者から仕事に行く前に診てもらい、大変感謝されている。

また、7階に運動をベースに「まほうの学校」という名前で市民の健康づくりを実施し、心理面支援に医師が個別に面接し、健康支援には保健師を活用する、また、栄養改善支援には管理栄養士しを、運動支援に健康運動指導士及び健康運動実践指導者を配置し、市民の健康づくりを支援して見える。

また、門前薬局では、独自の管理栄養士を雇い、居宅薬剤指導に出かける時には、この管理栄養士も同行し誤嚥予防のため、食事の仕方や食料の硬さなどの指導をし、特に高齢者が誤嚥をすると肺炎を起こしやすくなり、管理栄養士の指導が大変重要な役割を担っている。

土岐市においても、門前薬局を考える必要があると考える。

本荘第一病院及び薬局は民間であり、常に患者に対しより良い医療サービスを提供することに日々努めて見え、医療機関の役割を十分に果たして見える。

土岐市総合病院の空き病棟の再利用を考え運動施設を併設する、また、特別養護老人ホームへの切り替え等の検討することも必要と考える。

\*横手市大森病院について

大森病院は、病院と他の4施設高齢者等保健福祉センター（在宅介護支援センター）介護老人保健施設「老健おおもり」及び特別養護老人ホーム「白寿閣」並びに居宅支援センター「森の家」（通所介護事業所・高齢者支援ハウス）で形成されており、「健康の丘おおもり」として平成10年4月に開設され、病院を中心として医療の提供だけではなく、保健と福祉が一体となり、総合的なサービスを提供し、各施設が連携を図りながら、より質の高い地域包括ケアシステムの確立を行っている。

市立大森病院・保健福祉センター・老健おおもりの3施設は渡り廊下で結ばれており、各スタッフの連携強化に繋がっている、また、徹底したバリアフリー対策を行い患者さん等の安全に気を配ってみえる。

職員からのアドバイスで、城西大学伊関教授からのアドバイスにより、障がい者病棟を開設されており、「医療収支が良好であるため、一度話を聞いてくると良い」との提言があり、視察に行った。

また、小野院長先生自ら直接パワーポイントで詳しく説明を受け、院長先生の人柄良さと共に病院経営に対する姿勢が伺えた。

小野院長先生の発案により「リハビリ遠足」を企画され、国保補助事業として、看護師・リハビリステーションスタッフ及び管理栄養士を同行させ、バスで1時間以内の範囲でリハビリのため遠足をし、患者さんからも人気のある事業で次の開催提案も患者さんから企画提案がなされている、とても素晴らしい事業と思う。

最近では民間の施設でも、四季に合わせお花見等の事業が展開されている、公立病院でもこの様な事業展開も視野に入れ、実施すべきと考える。